

展示解説

展示室で掲出している解説文です。改行やルビ、挿入写真・図面、重複する文言などは省略しています。作品解説は、出品目録番号を付けています。解説のない作品もあります。

解説パネル

対面所の障壁画

名古屋城本丸御殿対面所は、尾張藩初代藩主・徳川義直（1600～1650）が身内や家臣と対面する内向きの空間でした。上段之間と次之間には、樹木や建物、その地でにぎわう人々を精緻に描いた「風俗図」が飾られていました。対面所の障壁画を描いたのは、狩野甚之丞（生没年不詳）とその一門であると考えられています。

次之間「風俗図」は和歌山の景色を描いたと考えられています。和歌山は、義直の正室である春姫（1603?～1637）の生まれ故郷です。古来の名所・和歌浦を中心に景色が展開し、展示中の東面と南面には和歌山城下が描かれます。城下町で暮らす人々は、正月の遊びや見世物を楽しんでいます。このような庶民の生活は泰平の世の象徴であり、権力者の目指すべき理想でした。

経年劣化の影響を受けた箇所が見られますが、画面を観察すると、当初から緻密に描き込まれていたことがわかります。人物一人ひとりの表情、動き、衣服の文様は様々に描き分けられ、人々の生き生きとした様子が伝わります。「風俗図」に描かれたにぎやかな正月の城下町をお楽しみください。

障壁画の色と画題

藩主・徳川義直の私的な対面空間であった対面所では、義直の正室・春姫との婚礼の儀が行われた可能性が高いと考えられます。このような部屋の用途、部屋に入る人物の身分は、障壁画の主題選択と描き方に大きく関わっていました。

玄関や家臣と対面する公的な場である表書院は、金箔が輝く画面におよそ実物大の動植物を描いた障壁画が飾られ、美しいだけでなく臨場感のある空間をつくりました。

一方、対面所「風俗図」の画題は、動物と花鳥よりも格が高い画題である人物図です。対面所次之間「風俗図」に描かれた情景を眺めると、群青の岩絵の具で着色した海が広がり、金泥による地面と雲は柔らかな輝きを見せます。海辺の穏やかな風景に、豊かな色彩で細やかに諸景物を描いた気品あふれる作品です。

名古屋市有形文化財「享元絵巻」

「享元絵巻」は尾張藩7代藩主・徳川宗春（1696～1764）治世下の名古屋城下を描いた絵巻です。広小路本町から南の地域が描かれ、画面の右から左へ季節が移り替わるように四季の植物が景色を彩ります。通りにひしめく人々は皆、祭りや見世物を楽しんでおり、市中のにぎやかな声が聞こえてくるようです。

江戸幕府が質素儉約を推進する中、尾張藩では宗春が祭礼を豪華に行い、武士の芝居見物を認め芝居小屋を繁盛させ、遊行施設を作り、尾張藩はめざましい経済的発展を遂げました。しかし、この華やかな時代は長くは続きませんでした。藩の財政や風俗が悪化し、宗春は失脚します。宗春治世下の尾張を描いた「享元絵巻」は、人物のみならず店ののれんや看板まで緻密に描き込まれ、宗春が治めた活気あふれる城下を鮮明に伝えます。

平成11年（1999）、「享元絵巻」の復元模写が制作されました。復元模写制作では、綿密な調査によって原図の描法、材質などを推定し、図柄を描きます。経年劣化により変化した原図の当初の姿を伝える貴重な作品です。江戸時代に描かれた原図とあわせてご覧ください。

名所図に描かれた人々

名所は、古く和歌に詠まれたことではじまり、人々はその地を訪れることを夢に見ました。江戸時代には、伊勢詣の流行を機に旅がブームになります。道が整備されたことで旅をする人が増加しました。そして、各地の名所を紹介する絵入り本地誌が出版され、名所を描いた浮世絵も制作されました。高い視点から広く全体をとらえる図、寺社などの建物をクローズアップした図、歴史的な出来事をテーマとする図など、名所図は様々に描かれてきました。このような絵入り本や浮世絵に描かれた名所図には、その地で過ごす人々の姿も描かれました。

名古屋の名所を描いた絵入り本や地誌の挿絵を描いたのは、高力猿候庵（1756～1831）や小田切春江（1810～1888）など、尾張で作画活動をした人物です。猿候庵や春江は藩士でありながらも数々の挿絵や著書を手掛けました。伝承をそのまま伝えるのではなく、その地を訪れ、実際に見た景色を描いた図もあると指摘されています。彼らが名古屋の名所を紹介する挿絵にも、その地へ集う人々が描かれます。当時の慣習や文化、名所のにぎわいを伝える画中の人々にもご注目ください。

作品解説

1 国指定重要文化財 対面所次之間南側「風俗図〔石投・山伏〕」 江戸時代 慶長19年（1614） 名古屋城総合事務所蔵

次之間と入側（廊下）を仕切る障子の腰板に絵を描いた紙を貼り付けた障壁画です。右側の2面は和歌浦に続く岸辺で遠くを眺める人物と、海に石を投げる男たちがいます。岸辺に自生する松は、岩絵の具の緑青で松葉まで細かく描かれています。南面障壁画の左2面から東面襖（出品番号2）にかけて、場面は和歌山城下へと移ります。ここでは山にこもって修行をする山伏が城下を訪れた様子が描かれます。

2 国指定重要文化財 対面所次之間東側「風俗図〔綱引・見世物〕」 江戸時代 慶長19年（1614） 名古屋城総合事務所蔵

和歌山城下が描かれます。注連縄や左義長を作る人や、羽根つき、綱引、毬杖で遊ぶ子どもたちが描かれ、正月の情景を伝えます。門前では千秋万歳が披露され、見世物小屋では太刀の拔身と片手逆立ちの綱渡りが行われています。見世物小屋の中には観客が集まり、木に

登って見物する者まで現れます。左側2面に描かれた海は吹上浜と見られ、和歌山城以南の景色が広がります。

5 名古屋城ガラス乾板写真 「対面所南入側より上段之間・次之間を望む(障子なし)」 昭和15～16年(1940～41)頃 名古屋城総合事務所蔵

南側の入側（廊下）から対面所上段之間と次之間を写します。上段之間は次之間より床が一段高く、天井は二重折り上げ格天井で、書院のしつらえがある格式の高い空間でした。上段之間の障壁画には、上賀茂神社や愛宕山など京都の景色が描かれていました。

6 名古屋城ガラス乾板写真 「対面所次之間(焼失)西北側」 昭和15～16年(1940～41)頃 名古屋城総合事務所蔵

「風俗図」（出品番号1・2）を飾っていた対面所次之間を写します。北側の壁貼付障壁画は本丸御殿とともに焼失しましたが、襖は取り外しができたため避難できました。次之間の天井は湾曲させた折り上げ格天井、欄間は縦棧を入れた箴欄間です。欄間下の襖を開けると、藩主が座す上段之間へつながります。

7 名古屋城ガラス乾板写真 「対面所次之間東側襖絵 北より4枚目」 昭和15～16年(1940～41)頃 名古屋城総合事務所蔵

「風俗図」（出品番号2）のうち右から1面目を写します。襖の引手金具は全面鍍金され、一部に墨の着色が施されます。江戸時代に制作された引手金具は今も襖絵に取り付けられています。引手金具と並んで、留め具である打掛金具が取り付けられていました。現在は取り外され、痕跡のみ確認できます。

9～11 国指定重要文化財 上洛殿一之間天井画 「松に小禽図」「竹図」「梅図」 江戸時代寛永11年(1634) 名古屋城総合事務所蔵

おめでたい植物としてお正月飾りの定番の松、竹、梅をそれぞれ描いた天井画です。これらの植物は歳寒三友といいます。寒い冬にも青々と茂る松と竹、春の訪れを告げる梅の花は、厳しい寒さに耐える高潔な植物として好まれてきました。3面ともに墨でモチーフを描き、部分的に金砂子を散らします。「松に小禽図」は小さな鳥が車輪状に広がる松葉に飛んでくる様子を描きます。「竹図」は墨の濃淡をかえて繁茂する竹をあらわします。「梅図」は梅の枝先のみを描き、枝にはふっくらとした花卉の白梅が咲いています。

14 「名区小景」 上巻 嘉永元年(1848)上梓 名古屋城振興協会蔵

「名区小景」は尾張の名所にまつわる和歌・俳句・漢詩を掲載した絵入り本で、本資料は嘉永元年(1848)に出版された第二編です。巻末には読み手の一覧もあり、同時期の文化人を知る上でも重要な資料です。下段の「大池紙鳶」には、江戸時代に風揚げで賑わったと伝わる麴ヶ池が描かれます。画中では子どもたちが風揚げをしようと、背丈よりも大きな風を持っています。

15 「名区小景」 下巻 嘉永元年(1848)上梓 名古屋城振興協会蔵

上段に熱田宿の松飾が描かれます。葉が茂る長く大きな竹は、他にない熱田の松飾の特徴です。門前の女性は長い簪を挿し、華やかな姿で門前を歩いています。「名区小景」の挿絵全80図を描いたのは、尾張藩士・小田切春江（1810～1888）です。春江は「柳葉師納涼図」（出品番号19）を描いた高力猿候庵に学び、『尾張名所図会』をはじめ地誌や絵入り本の挿絵を多数手がけました。

16 「尾張名所独案内」 浅井広国著 明治26年(1893)発行 名古屋城振興協会蔵

尾張の名所を紹介します。序文には、尾張国は古来名所や旧跡が多くあり、それらの図絵も多く描かれるが、いずれも伝承を伝えるのみで正確さに欠けるので、編者自ら実地を巡り調査して記した、と制作背景が記されます。挿絵は遠近感のある実景に即した図で、東本願寺別院を訪れた人、多くの店が並んでいる大須観音の境内を通る人々が細かく描き込まれます。

17 「金城名古屋名所図」 後藤皆吉画 明治44年(1911)出版 名古屋城振興協会蔵

名古屋の名所を描いた多色摺り版画です。江戸時代から描かれてきた名古屋城、熱田神宮などの寺社だけでなく、明治44年1月に開館した愛知県商品陳列館や明治19年(1886)に設置された第三師団司令部が加えられます。人々の姿も和装や洋装と様々に描かれています。

18 「東海道鳴海図」 2代目歌川国綱筆 江戸時代後期 名古屋城振興協会蔵

14代将軍・徳川家茂（1846～1866）による文久3年（1863）年の上洛を描いた錦絵シリーズ「東海道名所風景」（または「御上洛東海道」）の1枚です。鳴海宿は、現在の名古屋市緑区に位置する東海道40番目の宿です。店先には有松・鳴海絞りの着物が並んでいます。行列の行く先に名古屋城の天守が見えることから、一行は北へと向かっているとわかります。

19 「葉師納涼図」 高力猿候庵筆 江戸時代後期 名古屋城振興協会蔵

広小路にあった新福院は柳葉師と呼ばれていました。毎年5月18日から7月7日まで夜間開帳が行われ、開帳には多くの人でにぎわったと伝わります。本作は高い視点から景観を広くとらえた鳥瞰図で、出店や見世物に人々が集う様子が描かれています。筆者の高力猿候庵（1756～1831）は自ら挿絵を手掛け、数多くの日記や著書を記しました。